PROJECT

文化人類学を自然化する方法にむけて

文 中川　敏

共同研究 ● 文化人類学を自然化する（2017－2020年度）

本プロジェクトは2017年10月に開始されたばかりであり、本稿執筆時でまだ2回の研究会しか開催されていない。第1回はプロジェクトの代表者であるわたしの2つの発表であった。研究会全体の流れを述べるにはまだ早い時期である。本稿では基本的には、代表者であるわたしがどのような意図のもとに本プロジェクトを組織したのかについて述べることとしたい。

自然化するとはどのようなことか

本プロジェクトの目的は、タイトルにある通り、「文化人類学を自然化する」ことにある。「自然化する」とは、一言で言えば、「文化人類学」を自然科学の一分野とすることである。

文化人類学が（あるいはより一般に通常「自然科学」とは見なされていない学問の一分野が）自然科学に対峙する方法はいくつかあるだろう。1つの極端は自然科学を「またもう1つのモノの見方」として、相対主義的に見るやり方である。自然科学を文化として見るのだ。それを徹底して行なったのが、わたしの『言語ゲームが世界を創る』（中川 2009）である。その対極にあるのが方法として自然科学の方法を採用するというやり方である。自然科学は「またもう1つのモノの見方」、「またもう1つの文化」などではなく、真理を探求する唯一の方法となる。文化を自然として見るのである。本プロジェクトは、この後者の立場をとり、そのような立場をとった時、人類学者にどのような地平が開かれてゆくのかを見ようとする実験である。

「哲学の自然化」と呼ばれる動向を本プロジェクトの1つの範例として、わたしは考えている。「哲学の自然化」から分かりやすい例を2つ挙げよう。1つは（わたしが20年以上前に学会で紹介したことのある）「削除主義」の議論である。かつてわれわれは「雷」や “witch” という言葉を使っていたが、それが間違った概念であることが分かった現在、われわれはそのような間違ったコトバをわれわれの語彙から削除すべきなのである。これが削除主義の主張である。スティッチは言う、「人類学を考えてみよう。ある種の感情（中略）は生物学に根差した（中略）普遍物であると主張する人類学者がいる。また、すべての感情が『社会的に構築された』と主張する人類学者もいる。しかし、もし削除主義が正しいのならば、この論争には根深い誤解が存在しているのだ。なぜなら、恐怖や驚愕そして嫌悪感というものは志向的な状態の一種であり、削除主義はそのようなものは存在しないと言っているのだから」（Stich 1992: 116）。

もう1つ、より具体的な例として「自然化された認識論」の中の1つの議論、「信頼主義」（reliabilism）を紹介しよう。人類学者が何度も取り組んできた「信念」をめぐる問題系である。これまでの哲学の議論では、ある信念が正しいとは、その信念がどのように他の信念によって正当化されるかが問題になっていた。信念を抱く者の心の中、内面が問題となっていたのだ。信頼主義は温度計を例にして次のように言う。温度計の信念（指している目盛）が正しいとは、それが外界（温度）と正しく関係しているときなのであると。温度計の信念の正しさに温度計の内面が関係しないように、人の信念の正しさにその人の内面は関係しないのである。

文化人類学とはいかなるものか

いささか極端な事例をことさらに単純化して紹介したが、もし、わたしたちがこれらの「哲学の自然化」に身を委ねるならば、「文化人類学」そのものがなくなってしまうという危惧がいだかれるだろう。じっさい削除主義に基づけば文化人類学は必要のない学問となるだろう。そして、もし、文化人類学の消失が正しい道ならば、わたしたちはそれをとるしかないだろう、と私は考える。しかし、文化人類学をいかにして残すべきか（極端な削除主義に対抗する仕方）を、とりあえずの課題の1つとしてあるべきだと考える。

この課題への1つの道筋を、哲学の自然化と文化人類学とを対比することからより明らかにしていこう。

日本における哲学の自然化の強力な推進者である戸田山のある言葉が参考となる。彼の基本的立場は「この世界にあるのは物理的なものだけ」という立場である（戸田山 2014: 24）。その立場にたちながら戸田山は「存在もどき」あるいは「ありそでなさそでやっぱりあるもの」、具体的には「意味」や「表象」や「自由」について語るのである。強調したいのは、彼は（人類学者が大好きな）「観点」による「現れ」は拒否するという点である。そして、わたしもこの「観点」議論を拒否したい。

人類学者が扱うのは「ありそでなさそでやっぱりないもの」である。妖術師や精霊たちだ。これまで、人類学者はこの「ないもの」たちを、じつはそれが観点によって現れてくると処理してきた。それは観点によって現れてくるわけではない。妖術師や精霊など、端的に、いないのだ。もし自然化されても文化人類学が生き残っているならば、それは、この問題、「ないもの」たちを語る仕方を自然科学的に処理することができたときであろう。

メンバー構成

以上で本プロジェクトがいままでの人類学とはまったく違う方向を向いていることは分かっていただけただろう。問題は行き先が茫漠としているということである。「自然科学」といったっていろいろある…というわけだ。もちろん、文化人類学の還元先を量子力学にすることなどを考えているわけではない。それでも、ちょっと考えただけでも候補として生物学や情報学や心理学などが思い浮かぶ。

この茫漠さは、言い換えれば、文化人類学の自然化が多くの可能性を秘めていることでもある。本プロジェクトのメンバーの選択は、この可能性を最大限に活用すべく、行なわれている。メンバーの紹介をしながら、自然化のさまざまな可能性について述べてゆきたい。

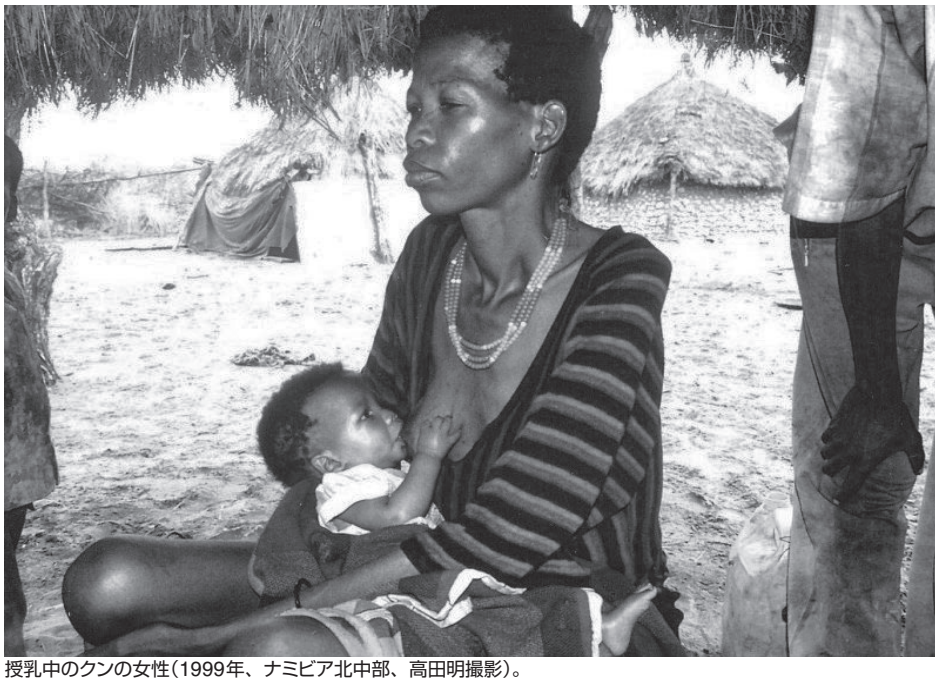
第1のグループは、哲学の自然化に親しみ、それに賛同したり反発したりしながら自らの人類学を辿ってきた人類学者から

なる。浜本満(九州大学名誉教授)は一連の論考の中で、進化論やプラグマティズムを活用しながら新しい人類学を模索している。中村潔(新潟大学)は『ヒューマン・ユニヴァーサルズ』(ブラウン 2002)などの翻訳を通じて自然化の1つの方法を精力的に紹介している。

第2のグループは非人類学者から成る。人類学が自然化のモデルとすべき2つの領域、心理学と霊長類学から1人ずつ参加してもらった。唐沢かおり(東京大学)は社会心理学者であり、自然主義の哲学者との共同研究も頻繁に行なっている。山田一憲(大阪大学)は霊長類学者であり、文化人類学者との共同の研究を行なってきている。そして、戸田山和久(名古屋大学)はすでに述べたように日本における哲学の自然化の旗頭の1人である。

本稿では、本プロジェクトが「これまでの人類学」とは違う方向を向いていることを強調してきたが、じつは(見方によっては)似た方向を向いている人類学もある。生態人類学、とりわけ、京都大学を中心にした「コミュニケーションの自然誌」研究会のグループである。第3のグループは生態人類学者および「コミュニケーションの自然誌」のメンバーからなる。飯田卓(国立民族学博物館)は京都大学出身の生態人類学者、そして高田明(京都大学)は現在の「自然誌」研究会の中心的メンバーである。2017年1月に開催された第2回研究会では、飯田・高田の両名に発表をお願いした。右の写真2枚は高田の発表「子育ての自然誌再考」で使われたものである。

ジムナスティック(乳児を抱き上げ、立位を保持、あるいは上下運動させる一連の行動)を行なうクンの女性(2002年、ナミビア北中部、高田明撮影)。


授乳中のクンの女性(1999年、ナミビア北中部、高田明撮影)。

第4グループの中川理(立教大学)、中空萌(広島大学)そして松尾瑞穂(国立民族学博物館)は「若手」とまとめることができるかもしれない。彼女ら・彼らは Actor Network Theory (ANT) を自家薬籠中のものとしながら、そのうえで自らの人類学を実践している人類学者である。ANT が進化論によく似ているという感想を、わたしは個人的にもっている。このグループからどのような刺激・貢献が本プロジェクトになされるのかは、わたしが最も期待するところである。

研究の方向性が大きく違うこれらの研究者が「自然化」というテーマで向かい合うとき、そこには衝突も含めて活発な議論が生まれるだろう。最終的な結果ももちろん大切だが、わたしとしてはその途中の経過もたいへんに楽しみにしている。

【参考文献】

戸田山和久 2014『哲学入門』東京：筑摩書房。
中川敏 2009『言語ゲームが世界を創る』京都：世界思想社。
ブラウン, ドナルド E. 2002『ヒューマン・ユニヴァーサルズ』鈴木光太郎・中村潔訳, 東京：新曜社。
Stich, Stephen P. 1996 *Deconstructing the Mind*. Oxford: Oxford University Press.

なかがわ さとし

大阪大学人間科学研究科教授。専門は文化人類学。東インドネシアの比較民族誌、理論人類学研究。著書に『異文化の語り方』(世界思想社 1992年)『言語ゲームが世界を創る』(世界思想社 2009年)などがある。